

ミケランジェロ・ブオナローティ

サン・ロレンツォ聖堂新聖具室壁面に設置される墓廟の案

1520-1521年  
石炭、紙 105×157mm  
カーサ・ブオナローティ

Michelangelo Buonarroti

*Studi per le tombe della Sagrestia Nuova*1520-1521  
matita nera, mm 105 × 157  
Firenze, Casa Buonarroti, inv. 49 A

三つのスケッチが描かれているこの紙片は、もともとは、大きな1枚の紙の一部をなしていたと考えられており、少なくとも2点の素描(カーサ・ブオナローティ 71A、および大英博物館 1859-6-25-545)との関係が指摘されている。

左に見られるのはすばやい筆致で描かれた建築の輪郭で、高い柱台に立つ柱による架構の内側に細い柱とアーチ形が組み込まれ、上部には石棺と思われるシルエットが見られる。このスケッチには全体の一部分しか描かれていないが、アーチ形や上部の石棺といった特徴から、サン・ロレンツォ聖堂新聖具室のための、アーチ上に石棺を持つ四面門形式〔交差点に設けられる四つの入口をもつ門〕の独立墓廟に関する、一連の計画案の一つとみなされるに至った。

中央に描かれているのも同様に、輪郭のみのスケッチで、左右に2本ずつ立つ柱は、対になった二つの持送りで支えられている。これは、新聖具室の壁面墓廟の早い時期の案と考えられているものだ。

右に描かれているのは、これら3点の中でもっとも複雑だが、これは設計の過程における異なるデザインが重なりあったものと考えられている。縦方向に見て、全体は大きく三つのままとまりに分けられる。まず一番下には、低い台に据えられた石棺があり、それは左右に分断された破風の形をした蓋に覆われているが、この特徴的な形は、実現された新聖具室の壁面墓廟のそれとよく似た姿を示している。素描では蓋の左上部分に像の輪郭がおぼろげに見えるが、実現した新聖具室では、まさにこの位置に《夜》や《黄昏》といった、あの名高い寓意像が横たわることになった(p. 128参照)。

石棺のすぐ上の層は、単純な幾何学トロンクの組み合わせで構成されていて、中心の円形が両脇の二つの矩形パネルに挟まれ、パネルの内部には花綱飾りとおぼしき曲線が見られる。

その上の部分は、おそらく三つの異なる案が重なって描かれている。まずその一つ目とは、左右の翼部に壁龕を備えた、三つの柱間からなる構造体であり、二番目の案とは、このデザインで最も背が

高い部分で、中央にアーチの形を持つものだ。三番目の案は、とても低いアーチのラインによって描かれ、左の上部に像の輪郭らしきもの—腰をかけた人体の、頭から2本の足までのように見える—が、かすかに描かれている。

この素描で注目すべき点は左下部分の形で、これは、正面に見えている石棺を側面から見たときのシルエットのようだ。だとすれば、この図全体の正面の姿とは、実は左側面にもつながり、さらには4面に渡って連なっているとも考えられるのだが、そのことから、これは聖具室の中央に置かれる4面の独立墓廟の案ではないかという可能性も指摘されている。本素描では、前述したように破風の形などに現在の壁面墓廟との類似性が確認できるので、つまり、この一葉は、独立墓廟と壁面墓廟の計画が、デザイン上においても確かな連続性をもっていたことの、一つの証拠ともなりえるものだ。(YS)

参考文献:

Ackerman 1961, pp. 21-32; トルナイ 1978-1982, vol. II, pp. 7-8, 28 (Tolnay 1975-1980); Argan, Contardi 1990; pp. 175-185; Ruschi 2007, pp. 73-74.



サン・ロレンツォ聖堂新聖具室

